

## マレーシアのプランテーションにおける労働と「男性性」：プランテーションの労働構造と作業の質

著者	吉村 真子
出版者	法政大学社会学部学会
雑誌名	社会志林
巻	48
号	2
ページ	1-13
発行年	2001-12
URL	<a href="http://doi.org/10.15002/00015197">http://doi.org/10.15002/00015197</a>

# マレーシアのプランテーションにおける労働と「男性性」

—プランテーションの労働構造と作業の質<sup>1)</sup>—

吉村真子

1. はじめに
2. エステートとインド人移住労働者
3. エステートの作物による作業とジェンダー
4. ゴムからオイル・パームへの転換：エステートのケース・スタディから
5. エステートにおける経営・生活スタイルとエステート文化
6. おわりに：エステートにおけるジェンダーと「男性性」・「男性的なるもの」

注

要約（日本語・英語）

参考文献

## 1. はじめに

マラヤ/マレーシア経済において、プランテーション（エステート）部門は20世紀初頭以降、重要な位置を占めてきた。歴史的に、英領マラヤのエステートはゴムが中心であったが、1980年代以降、マレーシア政府の農業多角化政策と収益性から、ゴムからオイル・パーム（油ヤシ）への植え替えが奨励され、エステート部門の主要作物は転換していった。

エステートにおける仕事や作業を考えると、ゴムのタッピング（樹液集め）は半熟練作業に分類できようが、スプレイ（肥料や消毒薬の配布など）の不熟練作業と同様に、女性もできる作業であり、エステートの労働力には女性も多く含まれていた。しかしながら、オイル・パームの収穫作業や積み上げ作業は力仕事であり、男性向きの肉体労働が作業の中心である。

こうしたゴムからオイル・パーム（油ヤシ）への転換によって、男性・女性の作業の分担やエステート部門における労働構造も変化してきた。

また、1980年代以降の労働力不足の深刻化によって、エステート部門は、外国人労働者に依存するようになった。エステート部門は、建設業や製造業と同様に男

性の外国人労働者を雇用しており、家内サーヴィス（家政婦）業が女性の外国人労働者を雇用するのとは対照的である。エステートの外国人労働者はインドネシアからの男性労働者がほとんどであり、かつてインド人がゴム・エステートへの出稼ぎ労働者として出てきた歴史を考えると、ここで男性の単身の出稼ぎという形式を新たに再生産しているともいえよう。

一般に、エステートは男社会であり、経営スタイルも労働構造も男性中心のヒエラルキーで成り立っている。本論文は、マレーシアのエステートのケースを用いながら、エステートにおける労働や作業の質・性格、およびジェンダーによる労働構造の変化について、エステートの仕事や経営システム、エステート文化の「男性的な性格」、「男性性」にふれながら論じることを目的とする。

## 2. エステートとインド人移住労働者

20世紀初頭、英領マラヤ時代に始まったゴム産業は、19世紀後半に発展してきた錫産業とともに、英領マラヤの二大産業として発展してきた。錫産業が華僑資本によって中国人クーリーを使っていたのに対して、ゴム産業はイギリス資本がインド人労働者を使って進められてきた。

ゴム・エステートの開拓にあたって、地元のマレー人小農は、エステートで賃金労働者として働くというそれまでの生活習慣にないようなことをするよりも、小規模ながらも自分でゴム栽培をすることを選択し、錫鉱山で賃金労働者として働く中国人は、賃金コストもかさみ、中国人独自のリクルートや労働管理など、秘密結社の結束も強く、ヨーロッパ系エステートがそこに割り込んで中国人労働者を大量に雇用できる望みはなかった。そのため、同じ英領植民地のインドから労働力が導入された。

1938年において、マラヤのゴム・エステート労働者の80%をインド人が占め、中国人は17%、マレー人はわずか2%であり<sup>2)</sup>、エステート労働者のほとんどがインド人であったことがわかる。また独立時の1957年におけるゴム・エステートの雇用（27.7万人）は、インド系52%、華人29%、マレー系19%、その他1%<sup>3)</sup>となっており、インド系が半分強を占めている。

当初、インド人の出稼ぎ労働者は、そのほとんどが男性であった。インドからの外国人労働者は一時的な出稼ぎとして位置づけられており、女性はエステートにおける重労働には向かず、コストがかかるだけとして、出稼ぎ労働者の対象とは見られていなかった。しかし1920年代半ばになると、植民地政府の移民政策が変わり、

1928年のインド人移民法によって男女比率が義務づけられ、インドからの女性の移民が奨励されるようになった。これは出稼ぎ労働者の定着化が求められるようになったためである<sup>4)</sup>。

そのため、1933年段階で、エステートの労働力に占める女性と児童の比率が34%に上っており、独立時の1957年には47%にまで増加している<sup>5)</sup>。

### 3. エステートの作物による作業とジェンダー

産業部門ごとの雇用を男女別にみると、マラヤが独立した1957年段階において、エステート部門での雇用では女性も4割ほどを占めているが、ほかの部門では、男性が大部分を占め、女性の雇用はほとんどないことがわかる。1970年の時点においても同様である。すなわち1970年以前は、女性の雇用はエステート部門が中心で、それ以外の雇用はほとんどなかった。またエステート部門における女性の雇用にしても、ゴム・エステートに集中している。これは、ゴムのエステートならば、タッピングなど女性ができる作業が中心となるためである。

他方、オイル・パームのエステートでは、重い実を収穫し、運搬するなどの力仕事作業が作業の中心であり、女性は除草作業や農薬・肥料の散布などの作業にかぎられてくる。そのため、マレーシア各地のエステートにおいて、ゴムからオイル・パームの植え替えが進んでいく1970年代以降、エステート部門における労働力において女性の比率は急速に減っている。

表1は、男女別、作物別のエステートにおける労働力構成である。エステート部門全体の労働力に占める男女の比率は1980年代においてもほぼ半々であるが、作物によって男女の比率が異なることが見てとれる。とくにゴム・エステートの労働力に占める女性比率は57%となっているが、オイル・パーム・エステートの労働力に占める女性比率は35%と少ない。またココア・エステートの労働力の女性比率も6割と男性より高くなっているのが特徴的である。

エステートにおける作業を作物別に見てみよう。

ゴムのセクションのおもな仕事は、ゴムのタッピング（樹液採取）、タッピング後の樹液の収集・運搬、整地・除草・雑草駆除、病虫害駆除の薬品散布、肥料散布作業などである。なかでもその中心部分はタッピングである。

ゴムのタッピングは、ゴム樹の幹の樹皮に斜めにナイフで傷を付け、にじみ出てくる樹液を下にくくりつけたタッピング・カップに集めるのである。

ゴムのタッピングは、力仕事ではないので、男性でなくともできる。また、タッ

表1 エステート部門における労働力（男女別，作物別）1960-86年

年	1960	1965	1970	1975	1980	1985	1986
ゴム							
男性 (%)	53	49	52	47	44	44	43
女性 (%)	42	45	46	51	55	56	57
子ども (%)	5	6	2	2	1	-	-
小計 (人)	285300	275160	226400	187250	167210	152450	111747
ココナッツ							
男性 (%)	56	55	57	54	52	50	55
女性 (%)	33	50	42	44	48	49	45
子ども (%)	11	5	1	2	-	1	-
小計 (人)	7490	5330	4200	3450	3710	2447	3478
オイル・パーム							
男性 (%)	60	59	59	63	66	62	65
女性 (%)	34	35	37	32	31	38	35
子ども (%)	6	6	4	5	3	-	-
小計 (人)	15560	17980	40870	66520	77840	82452	69418
茶							
男性 (%)	46	42	45	42	41	45	53
女性 (%)	44	47	50	51	57	55	45
子ども (%)	10	11	5	7	2	1	2
小計 (人)	4260	4660	3580	3470	2780	1408	1810
パイナップル							
男性 (%)	62	62	53	63	48	56	61
女性 (%)	35	35	45	37	50	44	39
子ども (%)	3	3	2	-	2	-	-
小計 (人)	1830	2250	2230	1050	1630	823	1162
ココア							
男性 (%)	-	-	-	-	-	38	40
女性 (%)	-	-	-	-	-	62	60
子ども (%)	-	-	-	-	-	-	-
小計 (人)	-	-	-	-	-	10751	16865
全エステート							
男性 (%)	53	50	53	51	51	50	51
女性 (%)	42	44	45	46	48	50	49
子ども (%)	5	6	2	3	1	-	-
合計 (人)	314440	300460	277280	261740	253170	232253	204480

Sources: 1) *Handbook of Labour Statistics of West Malaysia, 1968*, for, 1960-65 figures.

2) *Annual Survey of Employment and Wages*, Department of Labour and Manpower, 1982, for 1970-80 figures.

3) *Labour Indicators, 1985/86*, for 1985-86 figures.

出所) Selvakumaran [1994], Table 3.10, p.87.

ピング・カップの掃除や樹液を収集容器に集めたりなど、タッピング以外の作業をタッパー（樹液採取人）の家族（子どもなど）が手助けしていることも多い。

しかし、ゴムのタッピングそのものは熟練を要する仕事である。すなわち、できるだけ多く樹液を採るために、少しずつ、しかし樹自体は傷つけないようにしながら、樹の皮を削っていかなければならない。深く切りすぎて樹の幹を傷つけたり、樹皮も厚く削ってしまうと、ペナルティの対象である。

オイル・パームのセクションのおもな仕事は、房果（英語で fruit bunch, マレー語で tandan）の収穫・積み上げ・収集, 枝葉剪定, 整地・除草・雑草駆除, 病虫害駆除の薬品散布, 肥料の散布作業などである。房果はかなりの重さ（大きいものでは 30-40kg にもなる）であり, 収穫も積み上げ・収集もかなり力のいる重労働である。オイル・パームのセクションの労働者は, スプレイ（雑草駆除・病虫害駆除の各品・肥料の散布）以外は男性が中心である。

カカオ（ココア）のセクションのおもな仕事内容は, カカオの実の収穫, クラッキング（実を割って中身を取り出す）, 土地の維持・手入れ, 除草・雑草駆除, 病虫害駆除の薬品散布, 肥料散布などである。実の収穫を含めて, 作業に特別な技術は要らず, 経験を多少積めば十分にできる作業である。そのため中心となるクラッキングの作業は, 女性のワーカーも多い。

運送部門は, 運転のために資格も要るが, 通常, 運転手は全員が男性である。

このように, 作業のひとつひとつを考えた場合, ゴムのタッピングとオイル・パームの収穫・積み上げという, 作業の中心部分の違いは, 作業のジェンダーを決定付けるものであることがわかる。

#### 4. ゴムからオイル・パームへの転換：エステートのケース・スタディから

筆者は, ジョホール州のエステートの労働力調査を 1992 年から現在まで行なっているが, そのエステートでは, 1980 年代後半にゴムからオイル・パームへの植え替えと, 地域の労働力不足の深刻化による外国人労働力への転換が重なっていた<sup>6)</sup>。

同エステートでは, 1979 年に大規模な新規のオイル・パームの植え付けが行なわれている。その収穫時期にあたる 1982 年頃から収穫人の不足が指摘され, 地元で労働力が供給できないとして, 次第に外国人労働者が使われるようになっていった。その傾向は 1980 年代後半, とくに 1980 年代末から顕著になり, その後, 外

表2 HJS エステート：  
雇用形態別・エスニック別労働  
力構造（1992年7月現在）

雇用形態/ エスニシティ	男性 (人)	女性 (人)	計 (人)
直接雇用	103	129	232
マレー系	78	97	175
華人	8	8	16
インド系	17	24	41
請負	179	—	179
居住	93	—	93
非居住	86	—	86
計	282	129	411

出所) HJS Estate 提供の数字により作成。

表3 HJS エステート：  
雇用形態別・エスニック別労働  
力構造（1993年7月現在）

雇用形態/ エスニシティ	男性 (人)	女性 (人)	計 (人)
直接雇用	69	83	152
マレー系	54	66	120
華人	2	5	7
インド系	13	12	25
請負	237	—	237
居住	132	—	132
非居住	105	—	105
計	306	83	389

出所) HJS Estate 提供の数字により作成。

国人労働者に依存する構造が作られていった。とくに、オイル・パームの収穫や積み上げの作業は、当初から請負業者に下請けに出されており、その下請けの構造の中で、外国人労働者が請負労働者として組み込まれていったのである。

このエステートでは、ゴムの収量・生産性（ジョホール州では土質や気候から他州よりゴムの収量が劣る）や収益性（国際市場での価格や合成ゴムとの競合）から、オイル・パームの方が有利と判断され、ゴムよりオイル・パームへの植え替えが進められた。また収益性に加えて、ゴムのタッパーの確保もできないとして、1993年にはゴムのセクションのゴム樹をすべて切り倒した。

表2と表3はその前後の同エステートの労働力構造である。ゴム・セクションをやめる前の1992年段階に、女性労働者は129人いたが、ゴムの木を切り倒した1993年段階では83人に減っている。また、その同じ1年間で請負労働者が179人から237人に増えていることも指摘できるが、これはおもにオイル・パームの収穫にあてられていると推測できる。ゴム・セクションの閉鎖にともなって、それまでゴム・セクションでタッパーとして従事していたマレーシア人労働者は、解雇手当を受けて仕事を辞めるか、フィールドワーカーとして働きつづけるか、選択している。しかし並行して、オイル・パームへの転換による労働力における男性比率の増加（「男性化」）と請負労働への「外部化」が進んでいることが見てとれる。

またカカオのセクションは、労働力不足が深刻化するにつれて、マレーシア人労働者から外国人労働者に入れ替わっている。そのため、従来は女性も含めてマレーシア人労働者が担っていた作業は、とくに熟練も必要とされないために、インドネシア人の男性労働者が担うようになってきているのである。しかし、カカオは国際市場

価格の状況も悪く、生産にあたって赤字が出ているために、同エステートでは1990年代半ばにカカオの栽培をやめている。

このように、ゴムからオイル・パームへの転換の過程を見ると、作業の質の違いから求められる労働力が女性・子どもから男性労働者によって変わってきているが、同エステートの場合は、労働力不足から外国人労働者が導入されるのと同時に、オイル・パームの収穫作業の請負労働への外部化が進められている。

マレーシア経済は、1980年代以降の労働力不足の深刻化によって、外国人労働力への依存を深めていった。とくに外国人労働者の不法雇用が増加し、マレーシア政府は1989年以降、外国人労働者の登録（「合法化」）を進めていった<sup>7)</sup>。エステート部門は、建設業や製造業と同様に男性の外国人労働者を雇用しており、家内サービス（家政婦）業が女性の外国人労働者を雇用するのとは対照的である。エステートにおける仕事の「質・性格」から必要とされるのは男性の不熟練労働であり、現地の労働者が教育や生活水準の向上にともなって避けるようになってきた「劣悪な労働条件の低賃金で不熟練の肉体労働」（いわゆる3K職種）を外国人労働者が担っているのである。

エステートの外国人労働者はインドネシアからの男性労働者がほとんどであり、かつてインド人がゴム・エステートへの出稼ぎ労働者として出てきた歴史を考えると、ここで男性の単身の出稼ぎという形式を新たに再生産しているともいえよう。

## 5. エステートにおける経営・生活スタイルとエステート文化

マレーシアにおいて、プランテーションは、もともとイギリス人によって開かれ、経営されてきた。そのため、現在に至るも、プランテーションにおける経営システムや生活習慣もイギリスの伝統的なスタイルが残っていることが多い。

プランテーションにおける経営スタイルは、典型的な身分社会的な上下関係である。トップのマネージャーからアシスタント・マネージャー、オフィス・スタッフ、および（ワーカーの作業の指示・管理をする）コンダクターといったスタッフ・レベルと、そして現場のワーカー・レベルまで、上下の関係が貫かれている。上の職階の者が仕事や作業について話をするときには、椅子に座っていても立ち上がり、直立不動で聞くような感じである。

女性は、タッパー以外ではオフィス・スタッフの事務員やフィールドワーカーに限られ、マネージャー、アシスタント・マネージャー、オフィスのシニア・クラーク、コンダクターなど、ほとんど男性であり、職階のヒエラルキーの上部を占めて



いる。

かつては、賃金体系も男性と女性では異なっていた。同じタッピングの作業に従事していながら、戦前の1939年段階で日給はインド人男性50セン、女性40センであり（中国人労働者は1ドル50センであった）<sup>8)</sup>、1946年段階でインド人男性70セン、女性65セン（中国人労働者2-3.5ドル）<sup>9)</sup>であった。そして、男性労働者と女性労働者が同じ賃金体系で支払われるようになったのは、1976年協定からである。

プランテーションでの生活においては、女性が家事・育児、家族や家計の責任を負っている。プランテーションの労働者世帯にとって、家計の担い手は男性であり、女性の単身世帯や母子家庭でもない限り、家計にとって女性の労働は補助的なものと全般的に見なされている<sup>10)</sup>。筆者がインタビューしたケースでも、夫婦ともにエステート労働者の場合、ともに働かないと生活が成り立たないと言いつつ、家事、育児といった家のことは女性が担っている。

エステートの生活空間自体も独自のものである。エステートは、町からも地元の農村からも離れており、そこだけで生活が成り立っている。スタッフや労働者はそこに暮らし、そこで働き、エステート内の小さな売店で日用雑貨を買い、夕方には仲間とサッカーやバドミントンをして過ごす。若者は町に繰り出すこともあるが、結婚して子どもでも出来れば、静かな生活に落ち着いていく。そして、一般的な都市部とも農村部とも異なった独自の空間と文化が形成されている。

エステートの伝統的な生活スタイルにしても、イギリス式のプランテーションの伝統的なスタイルが維持されている。一日の仕事のスケジュールにしても、朝6時ごろに労働者の点呼を行い、作業が開始となっても、8時ごろには朝食、昼には昼食、そして午後にはお茶の時間が設けられている。1950年代や60年代のエステートでは、現地資本・現地人マネージャーの場合でも、近所のエステートとの付き合いも考慮して、マネージャーの家でイギリス・スタイルの午後のお茶（ミルク・ティーにビスケット、バラのジャムなど）を習慣にしているケースもあった。マネージャーの家では、娘にメイドがついて、入浴をさせ、着替えを手伝い、髪を梳かしつける。植民地時代のイギリス人の入植者の生活スタイルが、60年代になってもなお続いていたのである<sup>11)</sup>。

エステートにおける男性性の特徴故に、しばしばエステート独自の問題も指摘されてきた。女性に対する夫や父親といった家族や男性上司の言葉による虐待は一般的とも言われ、家庭における男性支配から、言葉による暴力や妻や子どもに対する

家庭内暴力（ドメスティック・ヴァイオレンス）といった問題が指摘されてきたし、アルコール依存症や自殺といった問題もエステート独自の問題としてエステート文化とともに議論されることも多かった。また昔は、広いフィールドでの早朝の作業（日が高くなるとゴムの樹液が固まってしまうため、まだ暗い夜明け前から作業を行う）のために、女性のタッパーが強姦されるケースも指摘された。

従来、一般社会から隔絶されたエステートという空間が、静かな、しかし閉ざされた生活空間であるがために、そうした精神的な問題も生ずると見なされてきた。現在にいたるも、エステート労働者の生活のイメージは、「貧しい」とか、「妻への虐待」といった暗いイメージで語られるのである。これは、そうした背景にあるエステート文化の男性性と無縁ではない。

## 7. おわりに：エステートにおけるジェンダーと「男性性」・「男性的なるもの」

プランテーションというのは、男性的なものである。経営や労働力の主要部分は男性が中心であり、男性的なヒエラルキーがその構造の原理を規定している。

エステートの作業自体も、本質的に「男性中心」のものである。肉体労働が中心であり、広いフィールドでの移動や単純作業が主要部分を占めている。しかし、作物や作業によって女性が任える部分があるのも事実であり、ゴムからオイル・パームへの転換が作業のジェンダー性にとって大きな意味を持つてくるのである。

筆者が調査したエステートのケースのように、ゴムからオイル・パームへの転換が、労働力不足から外国人労働者の導入の過程と重なっており、しかも作業の請負労働への外部化という合理化にもなっている。これは、労働力の男性化であるだけでなく、労働力の非正規化・マージナル化でもある。またインドネシア人労働者の男性の単身の出稼ぎの増加は、インド人の出稼ぎの歴史から考えると、エステートの男性文化の新たな再生産といえるだろう。

さらには、男性文化が特徴ともいえるエステート文化だが、そのエステート文化そのものも、閉鎖された独自の空間での、作りあげられた文化ともいえる。そしてマレーシア社会の発展と共に、マレーシアの若者はエステートで働くことを忌避していくのだが、それはエステート文化の否定でもあるだろう。

## 注

- 1) 本論文は、2001年11月3-4日にマレーシアのマレーシア国民大学（UKM）で開催された「マレーシアの男性性についての国際シンポジウム」（The International Symposium on Malaysian Masculinities, Universiti Kebangsaan Malaysia, Bangi, Malaysia on 3-4 November 2001）の報告論文（英語）を基にしている。また本論文は、2000-2003年度文部省科学研究費（基盤研究B，課題番号12572020）の研究の成果の一部である。
- 2) Malaya, Statistics Department [1938].
- 3) Malaya, Federation of Malaya [1959], Appendix 1, p.29.
- 4) Sandhu [1969], p.97-98; Selvakumaran [1994], p.133.
- 5) Gamba [1962], p.9.
- 6) 同エステートの研究については吉村 [1998], 第5章を参照されたい。
- 7) マレーシアの外国人労働者の登録（「合法化」）プロセスについては吉村 [1998], 第1章第3節を参照されたい。
- 8) Ramasamy [1994], p.36.
- 9) Ramasamy [1994], p.65.
- 10) Susan [1994], p.200; p.205.
- 11) 筆者のインタビューによる。

## 〈要約〉

マラヤ/マレーシア経済において、プランテーション（エステート）部門は20世紀初頭以降、重要な位置を占めてきた。歴史的に、英領マラヤのゴム・エステートの労働者はインドからの移民労働者がほとんどであったが、次第にはほかのエスニック集団の労働者も増えてきた。

ゴムのタッピング（樹液集め）は半熟練作業に分類できようが、スプレイ（肥料や消毒薬の配布など）の不熟練作業と同様に、女性もできる作業であり、エステートの労働力には女性も多く含まれていた。

しかしながら、1980年代以降のゴムからオイル・パーム（油ヤシ）への植替え推進によって、作物の違いによって求められる作業も異なるために、エステート部門における労働構造も変化してきた。すなわち、オイル・パームの収穫や積み上げ作業は力仕事であり、男性が作業の中心となっている。

また、1980年代以降の労働力不足の深刻化によって、エステート部門は、外国人労働者に依存するようになった。エステート部門は、建設業や製造業と同様に男性の外国人労働者を雇用しており、家内サーヴィス（家政婦）業が女性の外国人労働者を雇用するのは対照的である。エステートの外国人労働者はインドネシアからの男性労働者がほとんどであり、

かつてインド人がゴム・エステートへの出稼ぎ労働者として出てきた歴史を考えると、ここで男性の単身の出稼ぎという形式を新たに再生産しているともいえよう。

エステートは、経営スタイルも労働構造も男性中心のヒエラルキーで成り立っている。本論文は、マレーシアのエステートのケースを用いながら、エステートにおける労働の質・性格、およびジェンダーによる労働構造の変化、そしてエステートの男性的な経営システムと文化について論じることを目的とする。

#### <ACKNOWLEDGEMENT>

This paper is based on my English paper presented (read by the organiser) at the International Symposium on Malaysian Masculinities, Universiti Kebangsaan Malaysia, Bangi, Malaysia on 3-4 November 2001. I appreciate the kind arrangements by Dr. Wendy Smith, Director, Centre for Malaysian Studies, Monash Asia Institute, Monash University, Australia and Prof. Shamsul A. B., Director, ATMA, UKM, Malaysia.

#### <CONTENTS and ABSTRACT in English>

Paper Title: Labour and Masculinity in Plantations: Labour Force Structure and the Nature of Work

By Yoshimura, Mako (Dr.), Professor, Faculty of Social Sciences, Hosei University, Japan

1. Introduction
2. Estates and Indian Migrant Workers
3. Nature of Work by Crop and Gender
4. Re-plantation from Rubber to Oil Palm: A Case Study of an Estate
5. Management, Lifestyle and Culture in Estates
6. Conclusion: Gender and Masculinity in Estates

References

#### ABSTRACT

The plantation (estate) sector has been the major sector in the Malayan/Malaysian economy since the early 20th century. Historically, the majority of rubber estate workers had been Indian migrant workers in Malaya. Also, the sector included female labour because rubber tapping, which is classified as semi-skilled work, can be carried by women as well as other unskilled field work such as

spraying. Replanting from rubber to oil palm since the 1980's brought changes to the labour structure as the crops require different work. The oil palm requires male manual labour for harvesting and loading.

Simultaneously, the labour force of the sector has been replaced by migrant workers since the Malaysian economy faced the serious labour shortage in the 1980's. The estate sector utilises male migrant workers besides construction sector and manufacture sector whereas the domestic service sector utilises mainly female migrant workers. The nature of work in estates requires unskilled male workers and migrant workers fulfill "unskilled and low-paid manual jobs with poor working conditions" (so-called "3-D jobs") which are avoided by local workers with improvement of education and living standards.

The paper will examine the nature of work in estates and the changes of labour structure by gender with a case study and also discuss the management system and estate culture as masculinity.

〈参考文献〉

- Gamba, C. [1962], *The Origins of Trade Unionism in Malaya: A Study in Colonial Unrest*, Eastern Universities Press, Singapore.
- Jain, Ravindra K. [1970], *South Indians on the Plantation Frontier in Malaya*, University of Malaya Press, Kuala Lumpur.
- Malaya, Federation of Malaya [1959], *Annual Report on the Ministry of Labour and Social Welfare for the year 1957*, Government Printer, Kuala Lumpur.
- Malaya, Statistics Department [1938], *Rubber Statistics Handbook*, Kuala Lumpur.
- Ministry of Finance Malaysia. *Economic Report, various issues*, Percetakan Nasional Malaysia Bhd., Kuala Lumpur.
- Ministry of Human Resources, Malaysia, *Labour and Manpower Report, various issues*, Percetakan Nasional Malaysia Bhd., Kuala Lumpur.
- Ramasamy, P. [1994], *Plantation Labour, Unions, Capital, and the State in Peninsular Malaysia*, Oxford University Press, Kuala Lumpur.
- Selvakumaran Ramachandran [1994], *Indian Plantation Labour in Malaysia*, S. Abdul Majeed & Co., Kuala Lumpur.
- Susan Oorjitam, K.K. [1990], "The Development Process and Women's Participation in the Plantation Sector: A Macro Level Analysis of Trends and Patterns, 1957-1988," in Jamilah Arriffin and Siti Rohani Yahaya compiled, *Women and Development in Malaysia: Implication for Planning and Population Dynamics*, the

Population Studies Unit, the University of Malaya, Kuala Lumpur.

—— [1994], “Women and Poverty in the Estate Sector in Peninsular Malaysia” in Jamilah Arriffin ed., *Poverty Amidst Plenty*, Pelanduk Publications, Petaling Jaya.

Sandhu, K. S. [1969], *Indians in Malaya: Some Aspects of Their Immigration and Settlement, 1786-1957*, Cambridge University Press, Cambridge.

吉村真子 [1998] 『マレーシアの経済発展と労働力構造：エスニシティ，ジェンダー，ナショナルリティ』法政大学出版局。